

特別寄稿

水族館の歴史と沖縄美ら海水族館

沖縄美ら海水族館
館長 宮原 弘 和

水族館の始まりと発展

人々の海への憧れと、そこに住む生物への知的好奇心から海に潜る人が年々増えています。しかし、海に潜っても何時でもジンベエザメやマンタを見ることができる保証はありません。また、人が潜れるのはせいぜい数十メートルの深さですから、深い海にすむ魚に出会うことはできません。それに誰でも海に潜ることができるというわけでもありません。そこで、小さな子供でも身体の不自由な方でも、簡単に海の生き物たちを見ることができ、海やそこに棲む動物を楽しく理解することができる施設を求めて、水族館は生まれたのです。

世界初の水族館については諸説ありますが、ガラスの水槽を設置し、多くの人々が鑑賞できる近代的水槽は1853年ロンドン動物園の付属施設として造られた「フィッシュ・ハウス」といわれています。

日本の水族館の歴史は、1882年に開園した上野動物園に併設され、15ほどの水槽が置かれた「観魚室(うのをぞき)」と呼ばれる小さな淡水のアクアリウムが始まりです。その後、1897年の第2回水産博覧会において兵庫県の和田岬に設置された遊園地の「和楽園」に水族館が併設され、ここで初めて「水族館」という名称が用いられました。東京大学教授であり「水族館の父」と呼ばれる飯島魁によって設計されたこの水族館は、淡水水族館であった観魚室と異なり、濾過循環設備を備えた本格的な海水水族館でした。以後、全国で、各種の博覧会の集客施設として建設された水族館。海洋資源の開発の為、大学をはじめとする教育機関が建設した臨海実験所付属の水族館。その他、社会教育・地域振興を目的とした公立水族館。収益を目的とした民営の水族館が建設されるようになりました。博覧会水族館には、

前述の兵庫・和田岬水族館、1903年の第5回内国勸業博覧会水族館(大阪府・堺水族館)など、大きな博覧会には付属の集客施設としての水族館が官主導で作られています。近年では、沖縄国際海洋博覧会に建設された政府出展の海洋生物園(沖縄美ら海水族館の前身)があります。大学の臨海実験所の水族館には、1886年に東京大学の付属施設として建設された三崎臨海実験所があります。臨海研究所は海に面した環境のよい場所に建設されることが多かったため、美しい景観を取り入れた総合的な観光施設が作られるようになりました。

1960年から1970年代にかけては、環境教育の推進が世界的に拡大するなか、野生動物や自然環境をテーマとする動物園水族館が、あちこちに建設されました。1980年代は、アクリルガラスの技術革新もあり、それまでとは比較にならないほどの大型水族館の開館が相次ぎ、大型生物も展示できるようになりました。

現在、国内の水族館の数は、日本動物園水族館協会に加盟している67館の他、小さな水族館を含めると、その数は150館を超え、日本はまさしく水族館王国となりました。平成24年度の水族館の入場者数は日本動物園水族館協会加盟67館合計で3,350万人となっており、一施設あたりの年間の平均入場者数は約50万人となっています。

沖縄美ら海水族館の誕生

沖縄美ら海水族館は、1975年に開催された沖縄国際海洋博覧会の集客を目的とした、日本政府出展の海洋生物園が始まりです。海洋博覧会終了後、跡地は「都市公園法」に基づき、国営沖縄海洋博覧会記念公園として整備され、1976年9月から開園し、水

族館は、「国営沖縄記念公園水族館」として、公園内では最も利用者の多い人気スポットとして、年間約80万人のお客様が訪れました。人気の要因は、沖縄近海の定置網漁業の発達により、ジンベエザメやオニイトマキエイをはじめとした大型魚類の展示が可能となり、県内外から多くのお客さんが来館するようになったことです。加えてミナミバンドウイルカを中心とした軽快なイルカショーや、教育的なイルカ的能力展示も大きな魅力でした。しかし、長い歳月の経過による施設の老朽化により2002年8月31日を以て閉館しました。旧水族館の閉館に伴い、あらかじめ建設が進められていた水槽にジンベエザメ等の生物を2か月で移動し、「沖縄の海との出会い」をテーマに、2002年11月1日、「新国営沖縄記念公園水族館」が開館しました。新しい水族館の愛称は、13,897件の公募の中からNHK連続ドラマ「ちゅらさん」による沖縄ブームの影響もあり「沖縄美ら海水族館」と命名されました。

これからの沖縄美ら海水族館

沖縄の海は、(1)島々を取り巻く「サンゴ礁」、(2)沖合を流れる巨大な暖流「黒潮」、(3)南西諸島の東西に位置する「深海」の3つの要素により生物の生息環境が形作られており、そこには、多種多様な生物が生息する神秘的な海の世界が広がっています。

沖縄を訪れる年間約600万人の半数にあたる300万人近くのお客様が来館する「沖縄美ら海水族館」の魅力は、ウミンチュ（漁業者）と飼育スタッフが協力して捕獲したジンベエザメや色鮮やかな熱帯魚を、短時間で安全に水族館に搬入することができる技術と、時間2,000 t以上の新鮮な海水を供給することができる設備、新鮮海水と太陽光を利用し生きたサンゴが飼育できるサンゴ水槽、ジンベエザメやマンタの複数展示が可能な7,500 tの大水槽等の施設によるものです。優雅に泳ぐジンベエザメやマンタ等の巨大魚を一望できる巨大アクリルパネル（高さ8.2m、幅22.5m、厚さ60cm）は、大きな魅力となっています。

沖縄美ら海水族館はこれまで、世界初のジンベエザメの長期飼育や板鰓類の繁殖においては世界最多のサメ類20種、エイ類8種の繁殖、世界初のオオメジロザメやマンタの繁殖、その他、日本初のアメリカカナティータやミナミバンドウイルカの繁殖の成績を残してきました。

今後は、これらの実績を踏まえつつ、魅力的な未飼育動物の飼育展示にチャレンジし、ジンベエザメの巨体への驚き、色鮮やかな熱帯魚の美しさ、多種多様な生き物への感動を通し、生物保護・環境保全の大切さを伝え、沖縄の美ら海を次の世代へ残していきます。